

田口八幡II遺跡

田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

田口八幡II遺跡

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



田口八幡II遺跡全景



田口八幡II遺跡調査区全景



田口八幡山遺跡出土遺物

序

前橋市は、市内中央部に利根川、広瀬川が流れ、敷島公園や前橋公園、峰公園、大室公園などの公園が市内各地にあり、近代詩のふるさとであり、「水と緑と詩のまち」と呼ばれる自然と文化、歴史に恵まれた町です。

市内には古代からの歴史を物語る古墳、寺院などの史跡が残り、古代東国の中核地であったことがわかります。

国指定の史跡は10ヶ所を数え、全国でも有数の地域といえます。現在、その整備も進められており、21世紀に残す文化財として地域の歴史を知る貴重な存在です。

また、市内では古代の人々の生活の跡もいたるところに残されており、各種の開発に伴っての発掘調査で発見されてきています。

前橋北部の赤城山南麓は、古代からの遺跡が市内でも特に多い地区で、土地改良事業が行われた田口地区も、小古墳が群をなして残されており、近世は佐渡奉行街道が通るなど史跡が多い地区です。

本年度の土地改良事業に伴っての発掘調査では、住居跡のほか、例の少ない鍛冶工房の調査が行われ、地域の歴史を知るための貴重な資料を得ることができました。

本調査実施にあたりまして、ご協力いただきました関係課、地元関係者の方々、調査に従事されました作業員の方々に感謝申し上げるとともに、本報告書が、市史解明の一助となることを祈念して序といたします。

平成12年3月28日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 渡辺勝利

例　　言

1. 本報告書は、前橋市田口町地区土地改良事業に伴う田口八幡II遺跡発掘報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市田口町436番地ほかに所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 渡辺勝利が、前橋市長 萩原 弥慈治と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者 佐藤則和・平石和明（前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係）

発掘調査期間 平成11年10月20日～平成11年12月3日

整理・報告書作成期間 平成11年12月6日～平成12年3月28日

4. 本書の原稿執筆・編集には、佐藤・平石が行った。なお、まとめの執筆は井上唯雄氏（前橋市教育委員会文化財保護課嘱託員）が行った。整理作業をはじめ、図版作成には、石原義夫・岩木 操・岸フクエ・渡木秋子・中澤光江・平林しのぶ・湯浅たま江・湯浅道子の協力があった。
5. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。

2. 採図に建設省国土地理院発行の1/5万地形図（前橋）と1/2.5万地形図（渋川）を使用した。

3. 本遺跡の略称は11B7である。

4. 本遺構および遺構施設の略称は次のとおりである。

H…古墳時代の住居 P…柱穴

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構 住居址…1/30・1/60 全体図…1/200・1/300

遺物 土器…1/3・1/4 鉄器…1/3

石器・石製品…1/3 2/3

6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図 烧土…

遺構断面図 構築面…

遺物実測図 須恵器断面…黒塗

灰釉陶器断面…

灰釉陶器内面…

黑色處理…

目 次

はじめに	
I 調査に至る経緯	2
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置	2
2 歴史的環境	2
III 調査の経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	6
IV 基本層序	8
V 遺構と遺物	9
VI まとめ	16

図 版

口絵 田口八幡II遺跡全景

田口八幡II遺跡調査区全景

PL

頁

田口八幡II遺跡出土遺物

頁

- | | | |
|--------------------------|----|---------------------------------|
| 1 H-1号住居址全景、ピット、
出土遺物 | 35 | 5 H-22~24号住居址 |
| 2 A区全景 | | H-22~24号住居址竪 |
| H-2~9号住居址 | | B, D区全景 |
| H-4, 5, 8号住居址竪 | 36 | 6 C区全景 |
| 3 H-10~15号住居址 | | 7 H-4, 7, 8, 13, 15, 20, 23号住居址 |
| H-15号住居址竪 | 37 | 出土の土器 |
| 4 H-16~21号住居址 | | 8 H-24号住居址出土の土器 |
| H-18, 19号住居址竪 | 38 | 鉄器・特殊遺物・石器・石製品 |

挿 図

Fig

頁

頁

- | | | |
|------------------|----|-----------------------------------|
| 1 田口八幡II遺跡の位置 | 1 | 13 H-4~7, 9号住居址 |
| 2 田口八幡II遺跡周辺遺跡図 | 5 | 14 H-10, 11, 12, 14号住居址 |
| 3 調査経過図 | 6 | 15 H-13, 15, 16号住居址 |
| 4 田口八幡II遺跡調査区設定図 | 7 | 16 H-17~19号住居址 |
| 5 B区東地点層序 | 8 | 17 H-20~22号住居址 |
| 6 C区西地点層序 | 8 | 18 H-23, 24号住居址 |
| 7 A区全体図 | 19 | 19 H-4, 7, 8, 13号住居址出土の土器 |
| 8 B区全体図 | 20 | 20 H-7, 8, 13, 15, 20, 23, 24号住居址 |
| 9 C区全体図 | 21 | 出土の土器 |
| 10 D区全体図 | 22 | 21 鉄器・特殊遺物 |
| 11 H-1号住居址 | 23 | 22 石器・石製品 |
| 12 H-2, 3, 8号住居址 | 24 | |

表

Tab

頁

頁

- | | | |
|--------------|----|---------|
| 1 土器観察表 | 18 | 3 鉄器観察表 |
| 2 特殊遺物・石器観察表 | 18 | |

調査参加者 石原義夫 岩木操 岸フクエ 渡木秋子 中澤光江 平林しのぶ 湯浅たま江 湯浅道子



Fig. 1 田口八橋II遺跡の位置

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市田口町を対象とした土地改良事業実施に伴い行われた。本調査地は「田口八幡Ⅰ遺跡」の隣接地であり、平成9年5月20日の田口八幡Ⅰ遺跡の試掘調査で遺跡地であることが確認されている。

平成11年9月7日付、前橋市長 萩原弥慈治より田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団(団長 渡辺勝利)はこれを受け、両者の間で協議・調整を行い、10月19日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、10月20日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称「田口八幡Ⅱ遺跡」の「八幡」は旧地籍の小字名を採用した。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

田口八幡Ⅱ遺跡は、前橋市街地から北へ約7kmの田口町436番地他に所在する。

前橋市の北端部に位置し、遺跡地の東は富士見村、北は北橋村、西は利根川を挟んで対岸に吉岡村と隣接する。本遺跡地の前橋市田口町は、昭和29年に前橋市に合併されたもので、それまでは勢多郡南橋村大字田口であった。西には南北に国道17号線が走り、南には17号線から分岐する県道四ツ塚・原之郷・前橋線が東西に走る。そして、北橋村で利根川から取水した大正用水が町を横断し、前橋北部、東部の重要な農業用水となっている。

本遺跡地は、赤城火山斜面の西傾斜地の末端部に位置する。そのような傾斜地の中で北橋村と隣接する周辺には橋山、城山に代表されるような孤立丘に富む地形が目立ち、本遺跡地南にも孤立丘と思われる八幡山がある。これらの孤立丘は旧利根川により浸食された西側が崖となっている。この旧利根川は本遺跡の南方で方向を南東に変え、東南の広瀬川低地帯へと続く。東方には赤城火山斜面の白川扇状地が広がっており、本遺跡地東には赤城山麓から南流する法華沢川が流れ、放射谷が形成されている。谷部の低地では水源を利用した水田が広がり、尾根部の台地上は集落と桑畠を主とする畑作が営まれている。本遺跡地は台地の縁部にあたり、北西から東あるいは南東に向かって傾斜し、法華沢川が流れる低地につながる。そして、南には前橋市街地が眼下に広がり、まさに台地と平地の境という印象がある。標高は162~152mである。

2. 歴史的環境

田口八幡Ⅰ遺跡から検出された主な遺構は、平安時代の住居址である。また、覆土の中には、縄文土器の小片がみられた。周辺の遺跡を概観してみたい。

縄文時代：隣接する富士見村では、横室、原之郷、時沢など標高150m前後の地域から、傾斜変換点である標高400~450mの地域にまで、縄文時代の遺跡地が分布している。時期的に見ると、遺跡数は前期と中期に多く、赤城山南麓の一般的な傾向と同様に、早期・後期・晩期は少ないようである。赤城山大洞では早期の土器が採

集された。北橋村の城山遺跡(1)は、撫糸文系土器(夏島式期から稻荷台式)の時期に限定され、県内では縄文時代最古の集落の一つに数えられている。竪穴住居址 6軒、集石遺構 6、土坑25基が検出された。北橋村の柴山遺跡(3)は、前期・中期の竪穴住居址が17軒が検出された。富士見村の田中遺跡(30)では、早期末葉から前期にわたる土器が出土し、前期の竪穴住居址 2軒、土坑のほか、特に配石遺構が注目されている。富士見村の陣場遺跡(27)では、前期の竪穴住居址が 7軒のうち、小型石棒を伴う住居があった。中期の竪穴住居址が16軒、後期の敷石住居址は 2軒検出された。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、前期の竪穴住居址が 5軒検出された。富士見村の上庄司原東遺跡(26)では、前期の竪穴住居址 5軒が検出された。うち、2軒から小型石棒が出土している。富士見村の白川遺跡(14)では、後期の竪穴住居址が 1軒検出された。富士見村の愛宕山遺跡(16)では、前期の遺物、竪穴住居址が12軒検出された。富士見村の田中田遺跡(32)は、前期の竪穴住居址が 2軒検出された。富士見村の雍谷戸遺跡(6)では、前期の竪穴住居址 1軒が検出された。富士見村の久保田遺跡(21)は、前期の遺物、竪穴住居址が 6軒が検出された。富士見村の岩之下遺跡では、前期の遺構・遺物、富士見村の長泉寺遺跡(11)では、前期と中期の遺構が検出された。富士見村の由森遺跡(13)は、竪穴住居が 2軒検出された。上細井町にある西堀遺跡では土坑 1基が検出された。

弥生時代：田口八幡 I 遺跡の周辺地域では、弥生時代の遺構は検出されていない。富士見村の田中田遺跡(32)では、中期前半の須和田式に比定されると思われる土器片が多数出土している。このことから、この周辺地域でも弥生時代の遺構の存在する可能性がある。

古墳時代：田口八幡 I 遺跡から、北東に約1000mの場所に、富士見村横室地区がある。この地区では、10基の古墳が存在している。田口八幡 I 遺跡の周囲で古墳が多く分布している地域は、白川沿いの富士見村原之郷・時沢・小沢、北橋村の米野・山口の地区である。標高は150~250mの範囲に多いが、米野から山口にかけては標高約400m付近まで分布している。田口町にある塩原塚古墳(27)は、墳丘の直径14m前後、高さ南端約3m、北端2.6mの円墳で両袖型の横穴式石室である。墳丘は川原石による葺石がなされている。石室入り口周辺部は特に丹念に葺かれていた。富士見村の初室古墳(24)は、墳丘の直径15m、幅約8mの平坦面を挟んで山側に馬蹄形の周堀がめぐる。自然石乱石積の両袖型の石室からは、金銅製頭椎太刀の柄頭と、これに伴う刀装具類、鉄製馬具、耳環、土器などが出土した。富士見村の田中田遺跡(32)は、前期から後期まで継続したとみられる竪穴住居址が66軒検出された。陣場遺跡(28)では、終末期の円墳を調査しており、直刀、須恵器などが出土している。上細井町にある南田之口遺跡では、竪穴住居址 8軒、掘立柱建物址 1軒、溝11条、土坑11基が検出された。青柳町にある引切塚遺跡(42)では、竪穴住居址が27軒検出された。上細井町にある西堀遺跡では、古墳時代後期鬼高 II 期の竪穴住居址が 3 軒検出された。富士見村の白川遺跡(14)では、FA 前後の中期の竪穴住居址が多く、16軒検出された。特に、竹製の小型籠が見つかり、類例も少なく貴重な資料である。富士見村の下庄司原東遺跡(26)では、前期の前方後方形を含む 4 基の方形周溝墓、竪穴住居址 1 軒、後期の竪穴住居址 11 軒が検出された。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、終末期の円墳 1 基が調査されている。富士見村の上庄司原西遺跡(26)では、前期の方形周溝墓 1 基が調査されている。富士見村の上庄司原北遺跡(26)では、終末期の円墳 1 基が調査されている。試掘では、縄文前期・中期・平安時代の遺構と遺物があることが分かっている。富士見村の上庄司原東遺跡(26)では、終末期の円墳 2 基が調査されている。そのうち、1 基は未盗掘で、直刀、小刀、馬具、ガラス小玉、鉄鐵、土器類が出土した。須恵器の子持ハソウは、ほかに類例の無い貴重なものである。

奈良・平安時代：この時期の集落も古墳時代と同様に、縄文時代の遺跡同様な分布がみられる。周辺の標高

150m～450mまでの地域で遺物の散布が比較的密に分布している。赤城山の地蔵岳南面(標高1370m付近)にも散布が認められており、山岳信仰に関連する遺物と思われている。富士見村の窪谷戸遺跡(6)では、竪穴住居址が50軒検出された。青柳町にある引切塚遺跡(42)では、奈良時代の竪穴住居址が3軒検出された。

青柳町にある青柳寄居遺跡(44)では、平安時代の竪穴住居址12軒のほか、水田址が検出された。富士見村の愛宕山遺跡(16)では、平安時代の炭窯跡が検出した。富士見村の岩之下遺跡(34)は、3×3間の掘立柱建物が東西に並んでいた。柱穴から墨書き土器も検出している。富士見村の久保田遺跡(21)は、竪穴住居址の15棟中1棟は小鍛冶遺構であった。富士見村の長泉寺遺跡(11)では、竪穴住居址4軒、掘立柱建物1軒、溝、土坑が検出された。平安時代の土坑は底面と壁面が焼け、さらに多量の藁灰が出土しているため、土器の焼成遺構の可能性も考えられている。富士見村の由森遺跡(13)は、平安時代の集落を中心とする遺跡で、竪穴住居址3軒、掘立柱建物10軒は、小規模ながら規格的に配置された様相が認められている。北橘村の柴山遺跡(3)は、竪穴住居址21軒、掘立柱建物、炭窯などが検出された。富士見村の陣場遺跡(26)では、竪穴住居から銅製帶金具、鉄製ハサミ、スキ先、刻字紡錘車などが出土している。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、竪穴住居址21軒が検出された。そのうち、300点を超える土錘が一括して出土したことが注目されている。富士見村の下庄司原東遺跡(26)では、竪穴住居址が40軒検出された。富士見村の上庄司原西遺跡では、竪穴住居跡が6軒検出された。上庄司原東遺跡(26)では、竪穴住居址が7軒、土坑墓1、中世の土坑墓1が検出された。富士見村の白川遺跡(14)では、竪穴住居址が、14軒検出された。



- | | | | | |
|----------|-----------|---------------|-----------|-------------|
| 1. 銀田城跡 | 10. 宗城遺跡 | 19. 森山古墳 | 28. 阵場古墳 | 37. 九十九山古墳 |
| 2. 城山道路 | 11. 長泉寺遺跡 | 20. 道上遺跡 | 29. 橋堂古墳 | 38. 原之郷東原遺跡 |
| 3. 紫山遺跡 | 12. 高橋遺跡 | 21. 久保田遺跡 | 30. 田中渡跡 | 39. 旭久保遺跡 |
| 4. 瓜山遺跡 | 13. 由森遺跡 | 22. 小沢の場 | 31. 寄居遺跡 | 40. 青柳附上遺跡 |
| 5. 丸山城跡 | 14. 白川遺跡 | 23. 厚之郷勝沢遺跡 | 32. 荒井古墳 | 41. 旭久保下遺跡 |
| 6. 猿谷戸遺跡 | 15. 犀屋古墳 | 24. 初室古墳 | 33. 田中田遺跡 | 42. 引切城遺跡 |
| 7. 滝窪城跡 | 16. 愛宕山遺跡 | 25. 庄司原古墳 | 34. 岩之下遺跡 | 43. 宿上遺跡 |
| 8. 宿原遺跡 | 17. 白向遺跡 | 26. 阵一・庄司源遺跡群 | 35. 金山城跡 | 44. 青柳寄居遺跡 |
| 9. 三反田遺跡 | 18. 日向遺跡 | 27. 塩原塚古墳 | 36. 九十九古墳 | |

Fig 2 田口八幡II遺跡周辺遺跡図

III 調査の経過

1. 調査方針

委託された調査箇所は幅 5 m の計画道路部分を中心とした 1,600m²である。調査範囲の形状から全体を A 区、B 区、C 区、D 区の 4 調査区に区分した。調査実施に際しては、まず発掘調査範囲に 4 m グリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向を Y 軸とし、北から南へ Y1, Y2, Y3***、東西方向を X 軸として西から東へ X1, X2, X3***、で表しそれぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

1. 土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。
2. 10cm四方以上の遺物は縮尺 1/20 にして図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に所属性を記録する。
3. 窓は原則として 1/10 で図化し、遺構平面図は原則として縮尺 1/20 にて実施する。

なお、今年度の測量の基準点は、X0・Y0 ポイントである。この地点の公共座標は第 IX 系 ($X = +49550.000$ m, $Y = -69780.000$ m) である。

2. 調査経過

発掘調査委託契約を 10 月 19 日に締結し、10 月 20 日から現地発掘調査を開始した。重機（バックフォー 0.4m³）により、A 区南より表土掘削を開始し、北へ向かって掘り進んだ。21 日から、ジョレンによる遺構確認、掘り下げ、精査を行った。A 区は八幡山の北東斜面にあるため、表土掘削には労を費やした。ローム層を掘り込んだ平安時代の鍛冶工房址一軒の検出にとどまった。22 日、B 区の表土掘削を行った。B 区のローム層は、北から南に向かって急傾斜で落ち込み、谷地を形成していた。段丘上のローム層を掘り込む、平安時代の住居址が検出した。床面レベルが等しい重複住居や、遺物量の多い住居址が検出され、精査に時間を要した。27 日、C 区の表土を掘削した。C 区の遺構面は、地表から浅いため耕作痕が多く、遺構が破壊されている部分もあり、プラン確認は困難であった。11 月 15 日、D 区を表土掘削し、同日、ジョレンによる遺構確認を行った。D 区の住居址は遺物量が少なく、床が浅い上に埋没土がやわらかかったので、3 日間で D 区の調査を終了した。12 月 2 日、調査区の空撮を実施し、3 日、現地での調査を終了した。

整理作業・報告書作成は、12 月 6 日から、翌年 3 月 28 日まで行った。

	10月	11月	12月
A 区			
B 区			
C 区			
D 区			



Fig 3 調査経過図

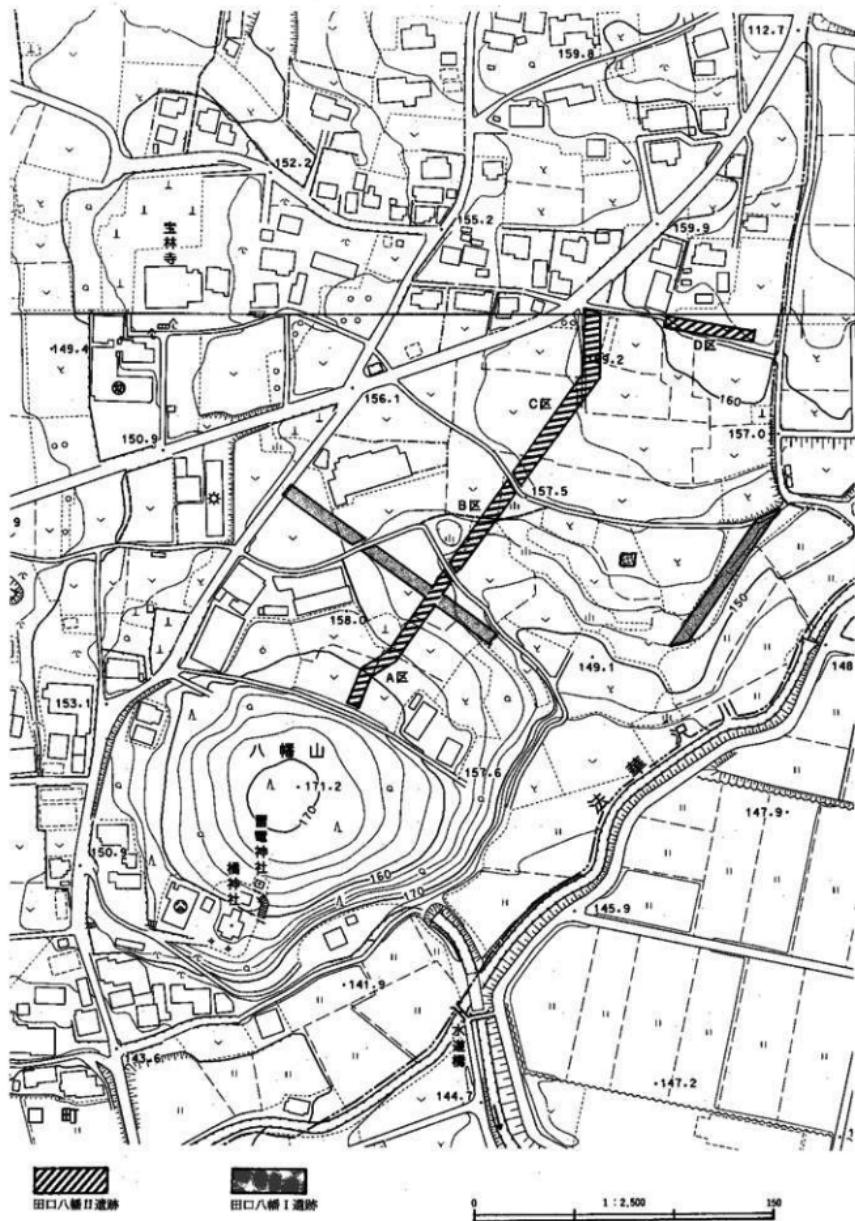


Fig. 4 田口八幡II遺跡調査区設定図

IV. 基本層序

本遺跡地は、赤城火山斜面の西傾斜地の末端部に位置し、ローム層が厚く堆積している。A区は田口八幡I遺跡の調査区との交差点付近からB区南部以外は表土が薄く、現地表面から遺構面であるローム層までは40cmしかなく、ローム層の上にはFP軽石混じりの黒色土層がある。黒色土層が最も堆積していたB区南では、現地表面から、にぶい黄褐色土層連構確認面まで235cmもあり、ローム層までは250cmもあった。B区東地点、C区西地点の各層序は、Fig5,6のとおりである。

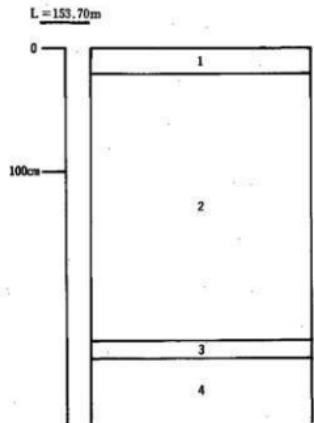


Fig. 5 B区東地点層序

- 1層 耕作土
- 2層 黒褐色細砂層 FP7%含む。
- 3層 にぶい黄褐色微砂層
ロームと黒色土の混土
- 4層 明黄褐色微砂層 ローム

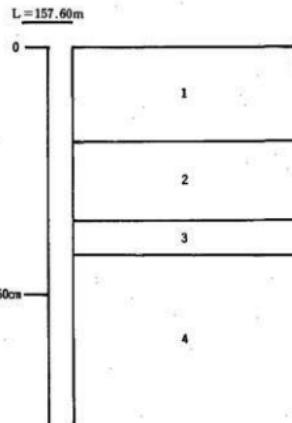


Fig. 6 C区西地点層序

- 1層 耕作土
- 2層 褐色細砂層 FP7%含む。
- 3層 褐色細砂層 FP1%含む。黒色土
- 4層 明黄褐色微砂層 ローム

V 遺構と遺物

調査区から検出された遺構は、竪穴住居址24軒である。奈良時代～平安にかけての竪穴住居址であったが、そのうち1軒は平安時代の小鍛冶遺構であった。

A区は八幡山の北東斜面にあたり、小鍛冶遺構1軒にとどまり、他の遺構は検出されなかった。A区からB区にかけて、田口八幡I遺跡調査区との交点付近の区域は、ローム層の上にFP軽石を含む黒色土が堆積していた。この黒色土層を掘り込んで5軒の住居跡が確認された。B区中央部より北側の調査区は、ローム層の段丘面にあたり、北側に向かって急激に立ち上がっている。段丘面上には、住居址が3軒検出した。

C区は今回の調査で最も遺構の多かった調査区であり、12軒の住居址が検出した。しかし、現在の耕作地の下に位置しており、遺構表面が耕作痕でカクランされている部分も多く、残存状況はきわめて悪かった。D区からは3軒の住居址が検出された。

なお、住居址の覆土、遺構表面から中期加曾利E式を中心に少量の前期関山、黒浜式土器片が見られたが、縄文時代の遺構は検出されなかった。

1 住居址

H-1号住居址 (A区 Fig.11 PL.1)

◎位 置 X13～14, Y59～60 ◎面積 (11.90m²) ◎方位 N-81°-W

◎形 状 長径 (4.04m) 短径 (3.56m) 四角形を呈する。掘り込みは49cm

◎床 面 石が多数点在し、凹凸がある。炉、石周辺に堅微面が広がる。北壁に周溝がある。

◎ 炉 中央から北東近くに位置し、幅65cm、奥行き65cmを測る。

東南隅に小型の炉が1基。

◎ピット 9基検出。

P1 長径50cm×短径38cm×深さ44.5cm P2 長径107cm×短径85cm×深さ64cm

P3 長径21cm×短径16cm×深さ78.5cm P4 長径22cm×短径15cm×深さ51cm

P5 長径40cm×短径31cm×深さ25.5cm P6 長径40cm×短径32cm×深さ112cm

P7 長径50cm×短径19cm×深さ28cm P8 長径30cm×短径25cm×深さ23.5cm

P9 長径34cm×短径32cm×深さ45.5cm

◎遺 物 縄文4点、土師器65点、須恵器24点、鐵1点、鉄滓22点、石10点、黒曜石2点、羽口103点。

うち、羽口1点、石鐵1点、鎌1点を示した。

◎備 考 9世紀前半。小鍛冶遺構と考えられる。

H-2号住居址 (B区 Fig.12 PL.2)

◎位 置 X28, Y40～41 ◎面積 (1.55m²) ◎方位 N-70°-W

◎形 状 長径 (2.68m) 短径 (0.83m) 掘り込みは18cm

◎床 面 平坦でFPを少量含むローム土。やや柔らかい。

◎ 窓 東壁に位置し、焚口部幅23cm、奥行き117cmを測る。

◎遺物 鉄1点

◎重複 H-3号住居址と重複。H-2号住居址のほうが古い。

◎備考 電周辺のみの検出。出土遺物が少ないため、形状、時期は不明。

H-3号住居址 (B区 Fig.12 PL.2)

◎位置 X28, Y41 ◎面積 (0.48m²) ◎方位N-79°-E

◎形状 長径 (0.22m) 短径 (1.23m) 挖り込みは16.5cm

◎床面 平坦でFPを少量含むローム土。やや柔らかい。

◎電 東壁に位置し、焚口部幅23cm、奥行き117cmを測る。

◎遺物 土師器5点、須恵器6点、鉄1点、磁石1点。うち、磁石1点を図示した。

◎重複 H-2号住居址と重複。H-2号住居址のほうが古い。

◎備考 電周辺のみの検出。出土遺物が少ないため、形状、時期は不明。

H-4号住居址 (B区 Fig.13 PL.2)

◎位置 X28~29, Y40 ◎面積 (6.98m²) ◎方位N-62°-W

◎形状 長径 (3.46m) 短径 (2.52m) 隅丸方形を呈する。掘り込みは12cm

◎床面 全体的に平坦で電周辺に堅密な面が広がる。南壁中央に1.2m、30cmの張り出し部がある。

◎電 東壁やや南に位置し、焚口部幅42cm、奥行き86cmを測る。

◎遺物 土錐1点、繩文4点、土師器134点、須恵器168点、灰釉陶器10点、

鉄11点、石2点、磁石1点。うち、須恵器高台碗2点、羽釜2点、土錐1点

磁石1点、鎌1点を図示した。

◎重複 H-5、H-6号住居址と重複。4,5,6の順と考えられる。

◎備考 出土遺物から9世紀中頃から後期にかけての時期と推定できる。

H-5号住居址 (B区 Fig.13 PL.2)

◎位置 X29~30, Y39~40 ◎面積 (12.01m²) ◎方位N-66°-W

◎形状 長径 (3.77m) 短径 (3.47m) 隅丸方形を呈する。掘り込みは29cm

◎床面 全体的に平坦で炉のある中央部、電周辺に堅密な面が広がる。

◎電 東壁に位置し、焚口部幅45cm、奥行き66cmを測る。

支柱に未使用の羽口を使用。左袖部に補強材として石を使用。

◎貯蔵穴 中央やや南より1基検出。 P1 長径46cm×短径35cm×深さ5cm

◎遺物 土師器17点、須恵器17点、灰釉陶器1点、羽口1点。うち、羽釜1点、羽口1点を図示した。

◎重複 H-4、H-6号住居址と重複。4,5,6の順と考えられる。

◎備考 出土遺物から10世紀前半の時期と推定できる。

H-6号住居址 (B区 Fig.13 PL.2)

◎位置 X28~29, Y39~40 ◎面積 (9.34m²) ◎方位N-78°-W

◎形状 長径 (5.18m) 短径 (2.62m) 隅丸方形を呈する。掘り込みは9cm

南壁に周溝がある。

◎床面 ほぼ平坦。部分的に堅緻な面がある。

◎炉・竈 確認できなかった。

◎遺物 土師器3点、須恵器19点、鉄3点、砥石1点。うち、羽釜1点、砥石1点を図示した。

◎重複 H-4号、H-5住居址と重複4,5,6の順と考えられる。

◎備考 出土遺物から10世紀中頃の時期と推定できる。

H-7号住居址 (B区 Fig.13 PL.2)

◎位置 X31~32, Y37~38 ◎面積 (10.00m²) ◎方位 N-68°-W

◎形状 長径 (3.97m) 短径 (2.80m) 圓丸方形を呈する。掘り込みは28.5cm

◎床面 全体的に平坦で、部分的に堅緻な面がある。北壁を中心に周溝がある。

◎竈 東壁南寄りの位置から焚き口部のみ確認できた。焚口部幅30cm。

◎遺物 繩文13点、土師器36点、須恵器131点、灰釉陶器4点、鉄1点、黒曜石1点、うち、須恵器高台椀1点、羽釜1点を図示した。

◎重複 H-9号住居址と重複。H-9号住居址のほうが古い。

◎備考 出土遺物から10世紀初頭の時期と推定できる。

H-8号住居址 (B区 Fig.12 PL.2)

◎位置 X31, Y36~37 ◎面積 (2.77m²) ◎方位 N-64°-W

◎形状 長径 (3.30m) 短径 (0.70m) 圓丸方形を呈する。掘り込みは39cm

◎床面 全体的に平坦でやや柔らかい床面。

◎竈 東壁南寄りに位置し、焚口部幅22cm、奥行き100cmを測る。

補強材に石材を使用。土器が多数出土。

◎貯蔵穴 東壁中央付近に1基検出。P1 長径40cm×短径24cm×深さ15.5cm

◎遺物 繩文1点、土師器14点、須恵器62点、灰釉陶器5点。

うち、灰釉高台椀1点、須恵器高台椀1点、土師器高脚高台皿1点

羽釜を1点を図示した。

◎備考 出土遺物から10世紀後半の時期と推定できる。

H-9号住居址 (B区 Fig.13 PL.2)

◎位置 X31~32, Y36~37 ◎面積 (2.77m²) ◎方位 N-64°-W

◎形状 長径 (2.28m) 短径 (1.85m) 圓形を呈すると思われる。掘り込みは26cm

◎床面 全体的に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。

◎竈・炉 確認されず。

◎遺物 繩文1点、土師器1点、須恵器7点、石2点

◎重複 H-7号住居址と重複。H-9号住居址のほうが古い。

◎備考 出土遺物がないため時期は不明だが、形状から縄文時代の住居址の可能性もある。

H-10号住居址 (C区 Fig.14 PL.3)

- ◎位 置 X34~35, Y30~32 ◎面積 (8.86m²) ◎方位 N-23°-E
- ◎形 状 長径 (4.98m) 短径 (2.38m) 四角形を呈する。掘り込みは16.5cm
- ◎床 面 全体的に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。
- ◎竈・炉 確認されず。
- ◎遺 物 繩文12点、土師器10点、須恵器8点、灰釉1点
- ◎備 考 出土遺物が少ないため、時期は不明。

H-11号住居址 (C区 Fig.14 PL.3)

- ◎位 置 X35~36, Y31 ◎面積 (6.18m²) ◎方位 N-20°-E
- ◎形 状 長径 (2.83m) 短径 (2.78m) 四角形を呈する。掘り込みは6cm
- ◎床 面 全体的に平坦でやや柔らかい床面。
- ◎竈・炉 確認されず。
- ◎ピット 2基検出。
P1 長径56cm×短径17cm×深さ35cm P2 長径46cm×短径16cm×深さ20cm
- ◎遺 物 繩文6点、土師器17点、須恵器8点、鉄1点
- ◎備 考 北は擾乱によって削平されている。出土遺物が少ないため、時期は不明。

H-12号住居址 (C区 Fig.14 PL.3)

- ◎位 置 X37, Y30 ◎面積 不明 ◎方位 N-80°-W
- ◎形 状 竈のみ
- ◎竈 火口部幅40cm、奥行き56cmを測る。
- ◎遺 物 土師器4点、須恵器1点
- ◎備 考 竈のみの検出のため、時期は不明。

H-13号住居址 (C区 Fig.15 PL.3)

- ◎位 置 X36~37, Y28~29 ◎面積 (7.15m²) ◎方位 N-23°-E
- ◎形 状 長径 (4.56m) 短径 (2.14m) 四角形を呈する。掘り込みは37cm
- ◎床 面 軽石混じりの黒色土。部分的にやや堅緻な面がある。掘り方がある。
- ◎竈・炉 確認されず。
- ◎遺 物 土錐3点、繩文96点、土師器160点、須恵器108点、灰釉陶器7点
鐵1点、石5点、砾石1点、磁器2点
うち、須恵器高台塊1点、墨書き器片1点、土錐3点、石錐1点、削器1点打製石斧2点を図示した。
- ◎重 複 H-14号住居址と重複。前後関係は不明
- ◎備 考 出土遺物から10世紀中頃から後半の時期と推定できる。

H-14号住居址 (C区 Fig.14 PL.3)

- ◎位 置 X37, Y28 ◎面積 不明 ◎方位N-58°-W
- ◎形 状 竪のみ
- ◎竪 焚口部幅24cm, 奥行き53cmを測る。
- ◎遺 物 なし
- ◎重 複 H-13号住居址と重複。前後関係は不明。
- ◎備 考 竪のみの検出のため、時期は不明。

H-15号住居址 (C区 Fig.15 PL.3)

- ◎位 置 X37~38, Y27~28 ◎面積 (16.77m²)
- ◎方 位 東竪 N-89°-W 北竪 N-1°-E
- ◎形 状 長径 (4.80m) 短径 (3.90m) 楕円方形を呈する。掘り込みは23.5cm
- ◎床 面 全体的に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。
- ◎竪 東壁南寄り、北壁東寄りの位置2カ所で確認できた。東竪は焚口部幅53cm, 奥行き56cm、北竪は、焚口部幅48cm, 奥行き25cmを測る。
- ◎貯蔵穴 中央部、南西部に2基検出。P₂は床下土坑の可能性がある。
P₁ 長径64cm×短径54cm×深さ26.5cm P₂ 長径112cm×短径84cm×深さ32cm
- ◎遺 物 繩文92点、土師器110点、須恵器28点、鉄1点、石6点、黒曜石2点、磁器1点、うち、土師器壺2点、石鐵1点、打製石斧1点、紡錘車軸1点を図示した。
- ◎重 複 H-18号住居址と重複。H-15号住居址のほうが古い。
- ◎備 考 出土遺物から9世紀初頭の時期と推定できる。

H-16号住居址 (C区 Fig.15 PL.4)

- ◎位 置 X37, Y27 ◎面積 不明 ◎方位N-61°-W
- ◎形 状 長径 (2.24m) 短径 (0.26m)
- ◎竪 竪底部の焼土、灰のみ検出。
- ◎遺 物 繩文2点、土師器14点、須恵器3点、
- ◎重 複 H-15号住居址と重複。H-16号住居址のほうが古い。
- ◎備 考 出土遺物から10世紀末から11世紀初頭の時期と推定できる。

H-17号住居址 (C区 Fig.16 PL.4)

- ◎位 置 X38~39, Y27 ◎面積 (9.44m²) ◎方位N-88°-W
- ◎形 状 長径 (4.13m) 短径 (3.85m) 楕円方形を呈する。掘り込みは13.5cm
- ◎床 面 全体に平坦であるが、部分的に凹凸あり。中央部に焼土・炭が点在。
部分的に堅緻な面がある。
- ◎竪・炉 確認されず。調査区東外にあると思われる。
- ◎遺 物 繩文76点、土師器28点、須恵器35点、灰釉陶器2点、鐵1点、石1点、黒曜石1点、磁器1点。うち、石鐵1点、紡錘車軸1点を図示した。

◎重複 H-18号住居址と重複。H-17号住居址のほうが古い。

◎備考 出土遺物から10世紀後半の時期と推定できる。

H-18号住居址 (C区 Fig.16 PL.4)

◎位置 X38, Y26~27 ◎面積 (8.48m²) ◎方位 N-11°-E

◎形状 長径 (3.64m) 短径 (3.29m) 潟丸方形を呈する。掘り込みは22cm

◎床面 全体に平坦であるが、部分的に凹凸あり。焼土・炭が点在する。全体的に堅緻な面がある。

◎竈 東壁に位置し、焚口部幅24cm、奥行き74cmを測る。

◎遺物 繩文71点、土師器57点、須恵器49点、鐵2点、銅3点。うち、石鐵2点を図示した。

◎重複 H-17号住居址と重複。H-17号住居址のほうが古い。

◎備考 出土遺物から10世紀末から11世紀初頭の時期と推定できる。

H-19号住居址 (C区 Fig.16 PL.4)

◎位置 X38~39, Y25~26 ◎面積 (2.86m²) ◎方位 N-70°-E

◎形状 長径 (1.84m) 短径 (1.80m) 潟丸方形を呈する。掘り込みは24cm

◎床面 全体的に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。

◎竈 東壁に位置し、焚口部幅28cm、奥行き60cmを測る。

◎遺物 繩文79点、土師器77点、須恵器38点、灰釉陶器2点、石鐵1点。うち、石鐵1点を図示した。

◎重複 H-5号住居址と重複。H-4号住居址のほうが古い。

◎備考 出土遺物から10世紀中頃の時期と推定できる。

H-20号住居址 (C区 Fig.17 PL.4)

◎位置 X41~42, Y22~23 ◎面積 (16.52m²) ◎方位 N-6°-E

◎形状 長径 (4.90m) 短径 (3.83m) 潟丸方形を呈する。掘り込みは16.5cm

◎床面 全体的にやや凹凸がある。中央部は擾乱により壊されている。

◎竈・炉 確認されず。調査区東外にあると思われる。

◎遺物 繩文50点、土師器48点、須恵器52点、灰釉陶器1点、うち、灯明皿2点、磁石1点を図示した。

◎備考 出土遺物から11世紀初頭の時期と推定できる。

H-21号住居址 (C区 Fig.17 PL.4)

◎位置 X43~44, Y17~18 ◎面積 (5.81m²) ◎方位 N-6°-E

◎形状 長径 (3.21m) 短径 (2.14m) 潟丸方形を呈する。掘り込みは8.5cm

◎床面 全体的に平坦でやや柔らかい。

◎竈・炉 確認されず。調査区東外にあると思われる。

◎遺物 繩文3点、土師器20点、須恵器2点

◎備考 出土遺物から10世紀中頃の時期と推定できる。

H-22号住居址 (D区 Fig.17 PL.5)

◎位 置 X54~55, Y14~15 ◎面積 (9.67m²) ◎方位N-67°-W

◎形 状 長径 (3.46m) 短径 (3.28m) 圓丸方形を呈する。掘り込みは23cm

◎床 面 全体的に平坦で部分的に堅緻な面がある。

◎竈 東壁南寄りに位置し、焚口部幅40cm、奥行き80cmを測る。

◎ピット 5基検出。

P 1 長径26cm×短径20cm×深さ4cm P 2 長径42cm×短径13cm×深さ32.5cm

P 3 長径28cm×短径26cm×深さ2.5cm P 4 長径38cm×短径32cm×深さ60.5cm

P 5 長径42cm×短径31cm×深さ8.5cm

◎遺 物 繩文19点、土師器34点、須恵器63点、灰釉陶器5点、鉄2点

◎備 考 出土遺物から10世紀後半の時期と推定できる。

H-23号住居址 (D区 Fig.18 PL.5)

◎位 置 X56~57, Y14~15 ◎面積 (7.61m²) ◎方位N-82°-W

◎形 状 長径 (2.96m) 短径 (2.76m) 圓丸方形を呈する。掘り込みは32.5cm

◎床 面 全体的に平坦で部分的に堅緻な面がある。

◎竈 東壁に位置し、焚口部幅27cm、奥行き50cmを測る。

◎貯藏穴 東南隅に1基検出。 P 1 長径76cm×短径62cm×深さ35.5cm

◎遺 物 繩文10点、土師器117点、須恵器63点、灰釉陶器14点、石1点、

黒曜石1点、うち、須恵器高台碗1点、灰釉陶器高台碗1点を図示した。

◎備 考 出土遺物から10世紀後半の時期と推定できる。

H-24号住居址 (D区 Fig.18 PL.5)

◎位 置 X60~61, Y15 ◎面積 (4.94m²) ◎方位N-74°-W

◎形 状 長径 (2.74m) 短径 (2.20m) 圓丸方形を呈する。掘り込みは22cm

◎床 面 全体的に平坦で部分的に堅緻な面がある。

◎竈 東壁に位置し、焚口部幅32cm、奥行き60cmを測る。

◎貯藏穴 東南隅に1基検出。 P 3 長径57cm×短径42cm×深さ21cm

◎ピット 2基検出。

P 1 長径35cm×短径28cm×深さ16.5cm P 2 長径20cm×短径18cm×深さ21.5cm

◎遺 物 繩文6点、土師器45点、須恵器1点、鉄4点、石1点

うち、土師器壺1点、鎌1点を図示した。

◎備 考 出土遺物から9世紀後半の時期と推定できる。

VI. まとめ

今回の調査では限られた範囲でありながら、住居址23軒と、鍛冶工房跡1軒の検出となった。田口八幡II遺跡周辺は、前橋市内で今までに発掘調査が行われる機会が少なく、資料も少ない地域となっており、今回の田口八幡II遺跡の発掘調査は、当地域を研究する上で、貴重な資料を得ることができた。特にA区より出土した鍛冶工房遺構は前橋市内においても例が少なく貴重な資料となった。以下、H-1号住居址鍛冶工房を中心とした今回の発掘調査の成果をまとめてみたい。

H-1号遺構について

1 在所

A区の南、八幡山の北麓に位置し、標高は160.5mである。今回の調査、および田口八幡I遺跡で検出された住居址群は約60m北、標高153mの位置を中心に点在して一般的な竪穴住居群の存在する集落部分とは間隔をおいて検出された。

2 遺構

本遺構は他の住居跡とは異なる様相を見せていることから、工房址と認定された。中から多くの鉄鋤、羽口残片、鍛造飛沫が検出されたことからその性格は製鉄関連工房である。

竪穴の規模は東西3.88m、南北3.15mの長方形掘りかたをもち、深さは確認面から49cmである。この部分西半分部に炉址、円形廐棄穴、鉄床石などが検出された。

炉址は西半部中央にあり、径50cmで底面に深く掘り込んでいる。最深部で26cmほどで、底部付近では赤く焼けたローム層が確認され、その上に還元されるまで強く青色に焼けた部分が検出され、この炉が高温で操業されたことを裏付けている。炉の南側に粘土が7cmほどの幅で切れる部分があり、その反対側の炉壁部が還元焼成されているところから、羽口挿入口と推定される。

廐棄穴は炉のすぐ南東に1mほど離れ、径80cm、深さ50cmほどの規模で掘り込まれている。この穴の中からは、径45cmほどの河原石や鉄鋤、羽口片、鍛造飛沫片が多量に認められた。特に鍛造飛沫片は底面に敷きつめられるような感じで、約30cmの厚さで確認され、鍛造工程の作業の豊富さを物語っている。また、この穴の南壁に2個の小穴があがたれていて、穴へおりるはしご状のものが据えられた可能性が考えられる。

鉄床石はこの廐棄穴のすぐ北に据えられている。河原石の表面を平らになるように長径45cm、短径30cm、厚さ20cmほどの石が据えられている。表面はかなり磨耗しており、周辺からは多量の鍛造飛沫片の散乱が認められた。

なお、周辺東側にも同様の大型の河原石が数個認められたが、竪穴の中の区画をするような溝状の施設との関連を考えると断熱壁的性格の基部に置かれたものとも見られる。

竪穴の東壁で中央やや南寄りの部分に径20cmほどの床面が円形に焼けた部分があったが、すぐ東側の後から掘られた穴で切られて性格を確定するには至っていない。

柱穴は、竪穴の掘りかたの中には明らかなものは検出されず、南壁に接して2本、北壁外に2本、ほぼ対応する位置に検出された。これによって上屋を想定すると一般的の竪穴住居とは異なってかなり上屋が高くなる特殊な構造のものが想定され、火熱による火災への配慮がうかがわれる。

3 出土遺物（図版参照）

羽口片一全体としては長さ11.3cm内外、径7.4cm、孔径1.9cmほどの小型のものがある。

特に小砾、砂を多く含む胎土で良質なものとはいえない。そのため、極端に小片に割れて、検出されたものでも101片に及んでいる。

土器 一須恵器、坏、高台碗を中心に比較的多量に出土した。その時期は9世紀前半を中心とした時期である。

砥石 一特に石を特定していないが付近の石を利用している。表面が磨耗してツルツルになっている。大型の刃物への対応も可能であろう。

製鉄関連遺物一多量の鍛造飛沫の他にノロ状の流動滓が多く見受けられる。また、純度の高い鉄片や未製品なども認められる。

4 小結

以上見てきたように本遺構は製鉄工房址である。その性格は鍛冶遺構として規定されよう。しかし、出土遺物に多量の鉄滓やノロを含むことからすると二次精練的な作業も合わせて行われていた可能性がある。

- (1) 掘りかたが不正形で柱穴位置から見て、かなり上屋が高くなる構造と見られる。
- (2) 集落から離れて存在する本遺構の位置と併せて考えると火災に対する当時の人の配慮がうかがわれる。
- (3) 床面が一般的の住居より荒れており、カマドも付設されない工房としての特徴を示している。
- (4) 一連の遺構、遺物が鍛冶の工程を表現している。
- (5) 県内の同種遺跡も9世紀段階のものが多いことからすると、当時の社会状況を反映している遺構といえる。

Tab.1 土器観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ			①土由 ②焼成 ③色調	④残存	成・整形方法		備 考	Fig
			口	底	高			口底	底		
1	H-4	虎頭瓶高台輪	13.4	6.1	細粒	良好	灰白	2/3	外側削離	回転木切り盤で削型。高台後付け。	19
2	H-4	虎頭瓶高台輪	(11.4)	5.4	粗粒	良好	灰白	1/3	外側削離	回転木切り盤で削型。高台後付け。	19
3	H-4	羽垂	18.2	23.5	細粒	良好	にじい青白	1/2	内側削離	丸削り。	20
4	H-4	羽垂	20.0	(20.5)	細粒	良好	にじい青白	1/3	内側削離	丸削り。	20
5	H-7	虎頭瓶高台輪	(18.5)	5.5	粗粒	良好	灰青白	1/2	外側削離	回転木切り盤で調整。	20
6	H-7	羽垂	22.2	26.5	細粒	良好	にじい黄青白	2/3	内側削離	丸削り。	20
7	H-8	虎頭瓶高台輪	15.4	6.3	細粒	良好	灰白	完形	外側削離	回転木切り盤で削型。高台後付け。	20
8	H-8	虎頭瓶高台輪	12.8	5.1	細粒	良好	にじい椎	4/5	外側削離	回転木切り盤で調整。	20
9	H-8	虎頭瓶高台輪	15.8	6.3	粗粒	良好	灰白	2/3	外側削離	向こみ切り盤で削型。高台後付け。	20
10	H-8	羽垂	21.0	26.6	細粒	良好	にじい椎	1/2	底	丸削り。	20
11	H-12	虎頭瓶高台輪	14.8	5.0	粗粒	良好	灰白	2/3	外側削離	回転木切り盤で削型。高台後付け。	20
12	H-13	土器底	(11.2)	3.5	細粒	良好	椎	1/4	内側削離	丸削り。	20
13	H-15	土器底	(13.2)	(3.8)	細粒	良好	にじい椎	1/4	外側削離	丸削り。	20
14	H-20	灯明座	8.8	1.9	細粒	良好	灰青白	完形	外側削離	回転木切り盤で調整。	20
15	H-20	灯明座	9.0	2.4	細粒	良好	灰青白	2/3	外側削離	回転木切り盤で調整。	20
16	H-23	虎頭瓶高台輪	—	(4.1)	細粒	良好	灰	1/2	外側削離	四輪木切り盤で削型。	20
17	H-23	虎頭瓶高台輪	—	(2.8)	細粒	良好	明オリーブグリーン	1/3	外側削離	回転木切り盤で調整。	20
18	H-24	土器底	(11.6)	3.4	細粒	良好	にじい椎	1/2	内側削離	丸削り。	20
19	F区底土	灯明座	9.8	2.7	細粒	良好	淡黄褐	3/4	外側削離	四輪木切り盤で削型。	20
20	C区底土	虎頭瓶	—	—	細粒	良好	灰白	1/3	外側削離	丸削り。	20
21	H-13底土	虎頭瓶	—	—	細粒	良好	暗緑灰	1/3	外側削離	丸削り。	20

注) 表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とした。

②焼成は、優良、良好、不良の三段階。

③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を〔 〕、復元値を()で示した。

Tab.2 特殊遺物・石器観察表

番号	出土位置	器 形	長さ	幅	厚	重さ	石 材	備 考		Fig
1	H-4	土錐	4.5	2.5	2.4	21.8	—	完形。中央部が大きく膨らむ。		21
2	H-13	土錐	5.8	1.3	1.3	10.2	—	ほぼ完形。		21
3	H-13	土錐	—	4.1	1.1	4.9	—	長軸の下半部が焼けている。		21
4	H-13	土錐	(2.2)	1.1	1.0	2.2	—	1/2残存。		21
5	C区南	土錐	4.6	1.1	1.0	5.0	—	両端が平坦に加工されている。		21
6	C区南	土錐	4.3	1.7	1.5	8.4	—	中央部が膨らむ。両端が一部欠損している。		21
7	H-1	羽口	(11.2)	7.3	7.5	440.0	—	端部が強く焼け、鉄が付着している。		21
8	H-5覆土	羽口	18.5	9.0	8.3	870.0	—	未使用。端部の1/3が欠損している。		21
9	H-1	石錐	1.7	1.3	0.3	0.8	緑色安岩	凹基無茎鍬。		22
10	H-13覆土	石錐	(2.3)	2.5	0.4	3.7	黑色安山岩	凹基無茎鍬。先端部欠損。		22
11	H-15	石錐	3.8	1.8	0.8	4.8	頁岩	凹基無茎鍬。		22
12	H-18	石錐	(1.7)	1.6	0.35	1.0	黑色安山岩	凹基無茎鍬。		22
13	H-18覆土	石錐	2.3	1.3	0.4	1.1	頁岩	凹基無茎鍬。先端部欠損。		22
14	H-19	石錐	2.2	1.8	0.3	1.1	頁岩	凹基無茎鍬。		22
15	H-17	石錐	2.1	1.4	0.3	1.1	黑色頁岩	凹基無茎鍬。		22
16	H-13	削器	7.1	10.2	2.3	142.0	黒色頁岩	表面に自然面を残す。		22
17	H-13覆土	打製石斧	(6.0)	4.4	2.0	52.5	黒色頁岩	西端縁に細かい調整。		22
18	H-13	打製石斧	10.9	4.5	1.8	93.0	黒色安山岩	西端縁から刃部にかけて細かい調整。		22
19	H-15	打製石斧	7.7	4.8	1.2	45.0	頁岩	西端縁から刃部にかけて細かい調整。		22
20	B区表土	石冠	7.1	5.5	2.1	140.0	—	—		22
21	H-3覆土	砾石	(8.3)	2.4	2.3	88.0	砾石	表面に著しい使用痕が認められる。		22
22	H-4	砾石	(11.2)	5.5	3.2	210.0	砾沢石	表面に著しい使用痕が認められる。		22
23	H-6	砾石	(5.8)	2.8	1.5	42.8	砾沢石	表面に使用痕が認められる。		22
24	H-20覆土	砾石	(8.5)	2.7	2.7	64.5	砾沢石	表面に著しい使用痕が認められる。		22

注) 表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はgであり、現存値は()で示した。

Tab.3 鉄器観察表

番号	出土位置	器 形	長さ	幅	厚	残存	備 考	Fig
1	H-1	鎌	(4.6)	3.4	0.4	1/4	—	21
2	H-4	鎌	13.8	1.5	0.3	完形	—	21
3	H-15	防鏟車	(10.3)	0.5	0.5	1/2	防鏟車の軸部分。	21
4	H-17	防鏟車	10.8	0.4	0.4	1/2	防鏟車の軸部分。	21
5	H-24	鎌	(18.1)	4.5	0.3	2/3	柄の抜群部に折り返しを有する。	21

注) 表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はgであり、現存値は()で示した。

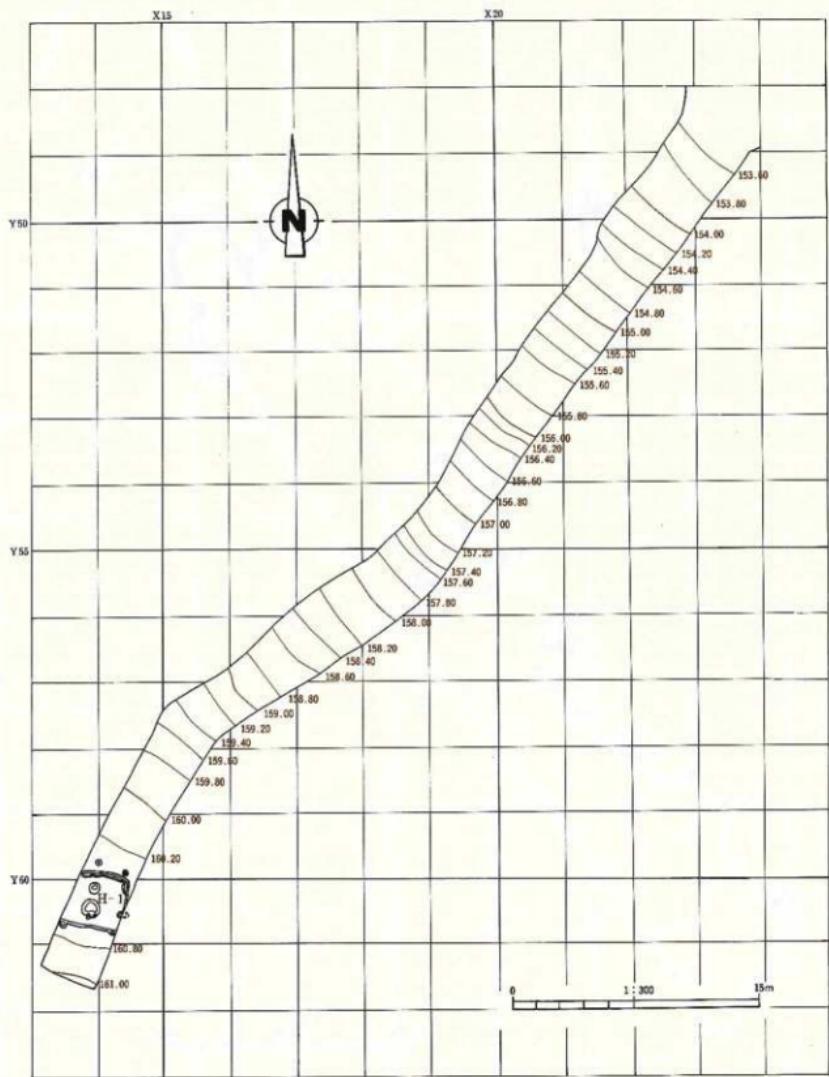


Fig. 7 A区全体図

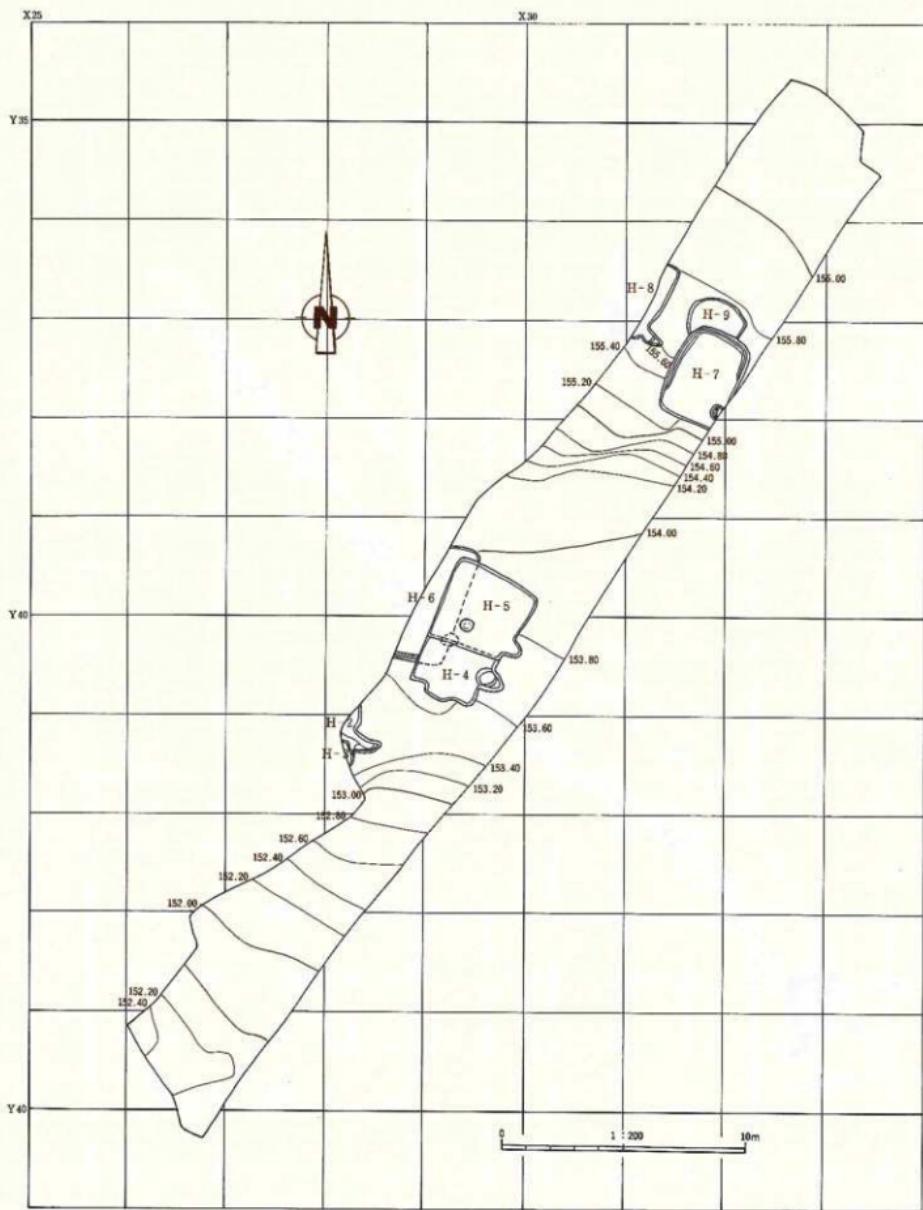


Fig 8 B区全体図

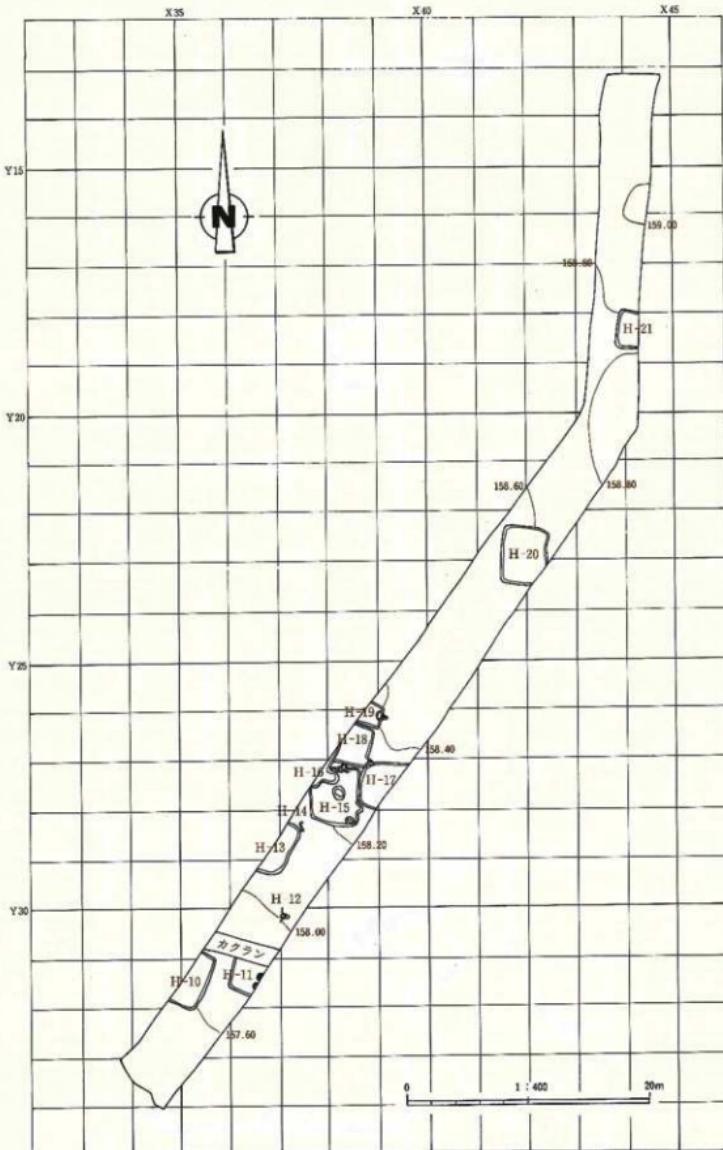


Fig 9 C区全体図

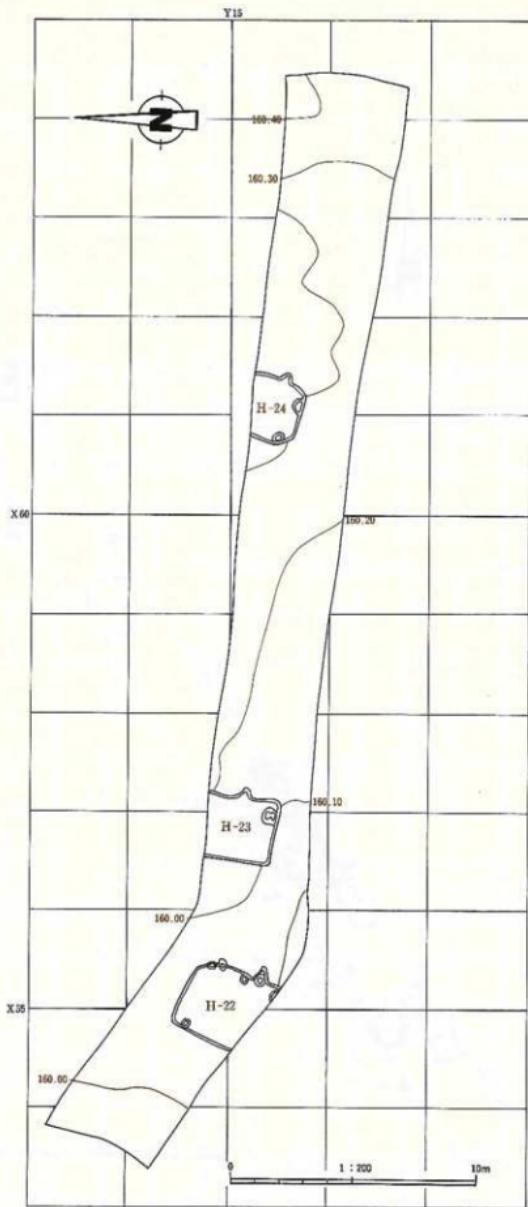


Fig10 D区全体図

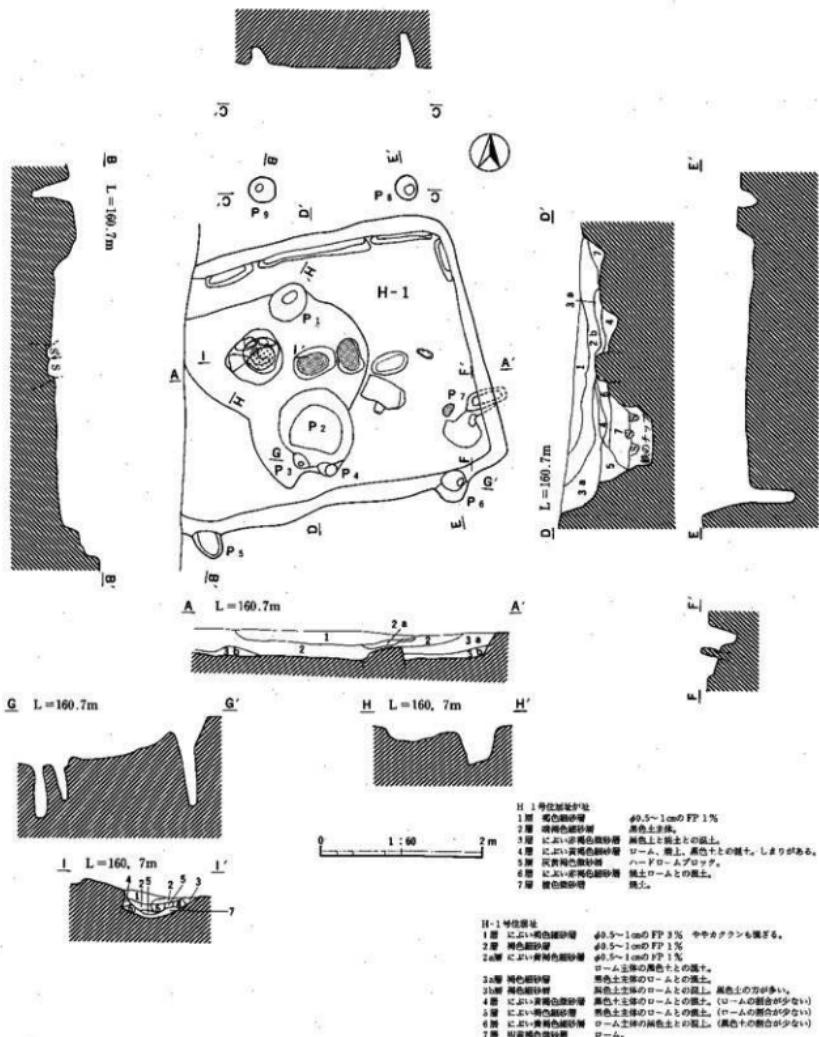
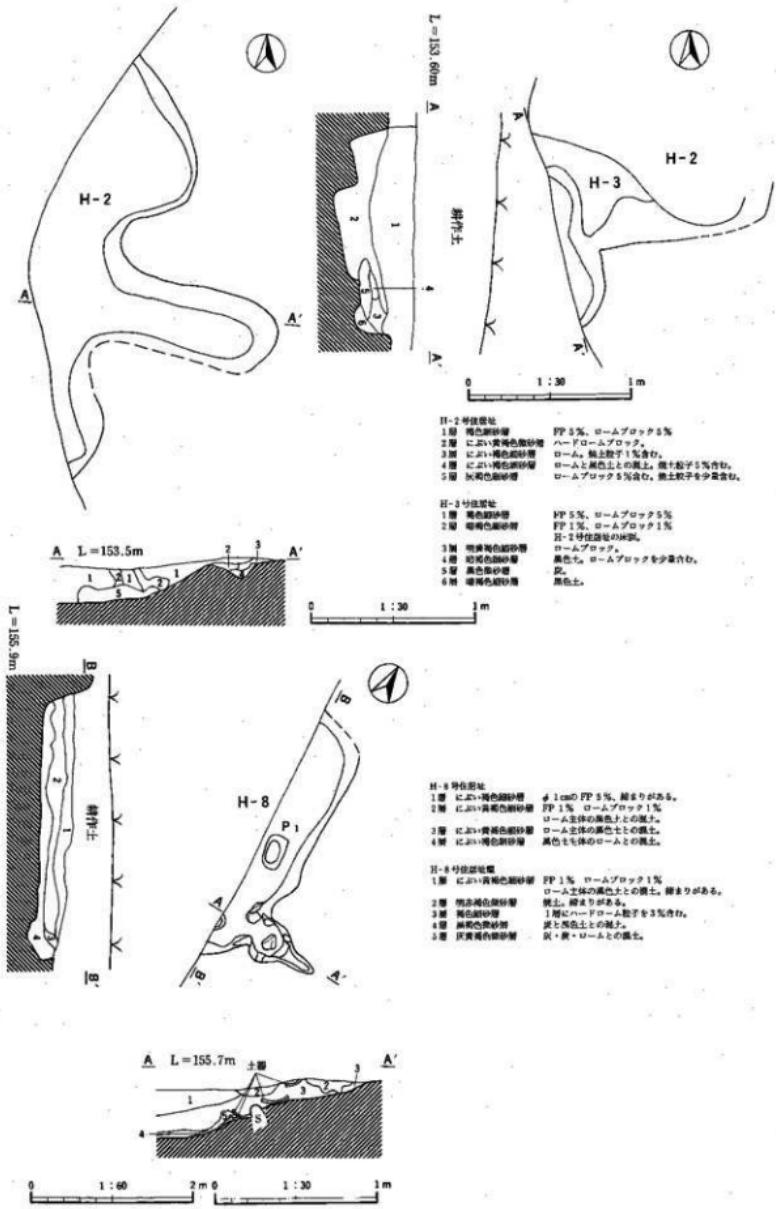
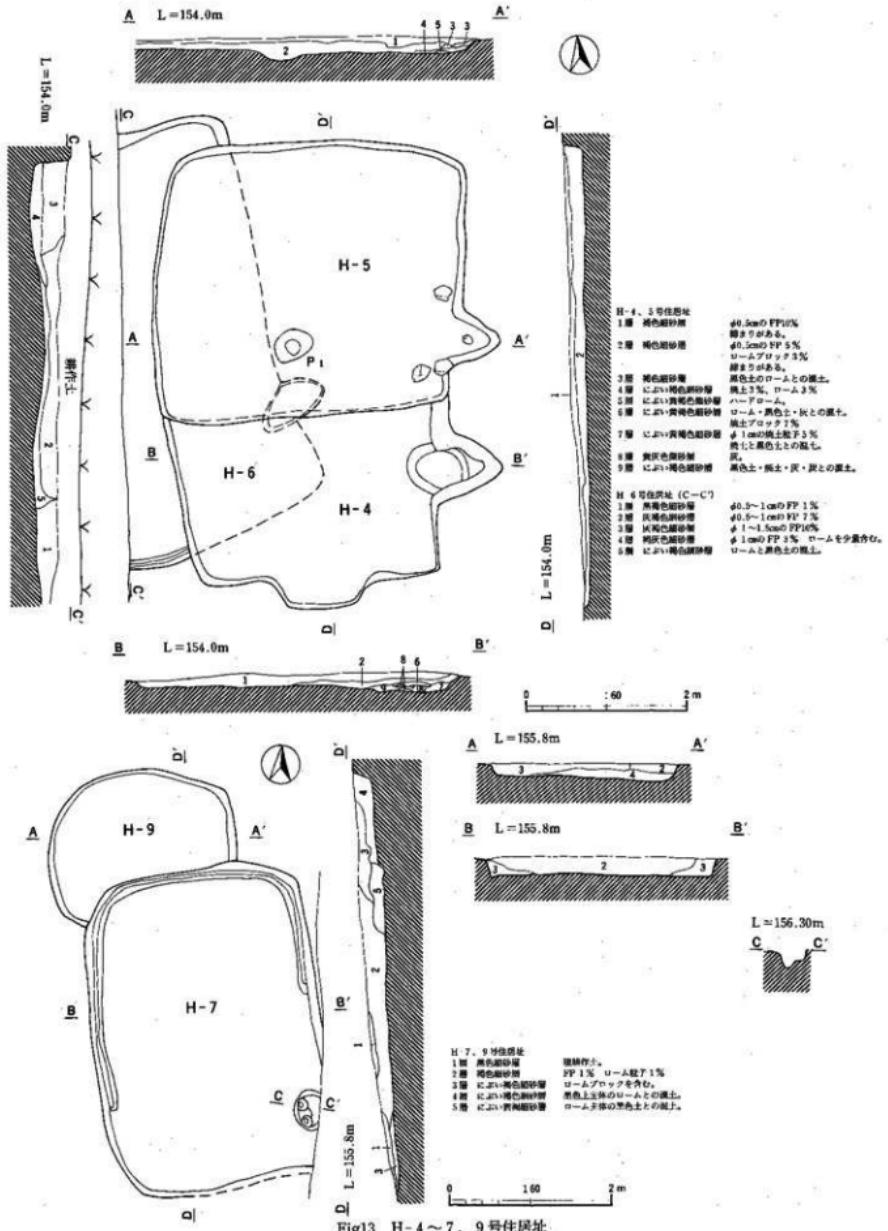


Fig11 H-1号住居址





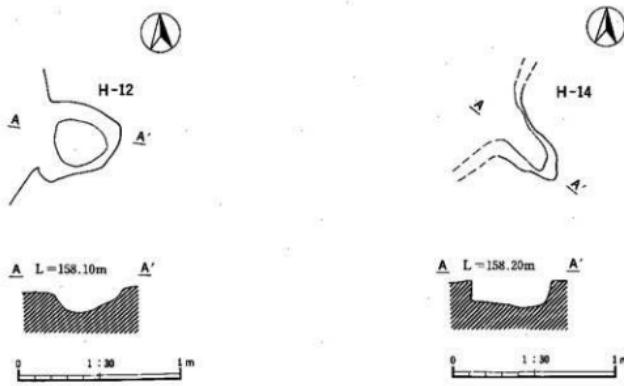
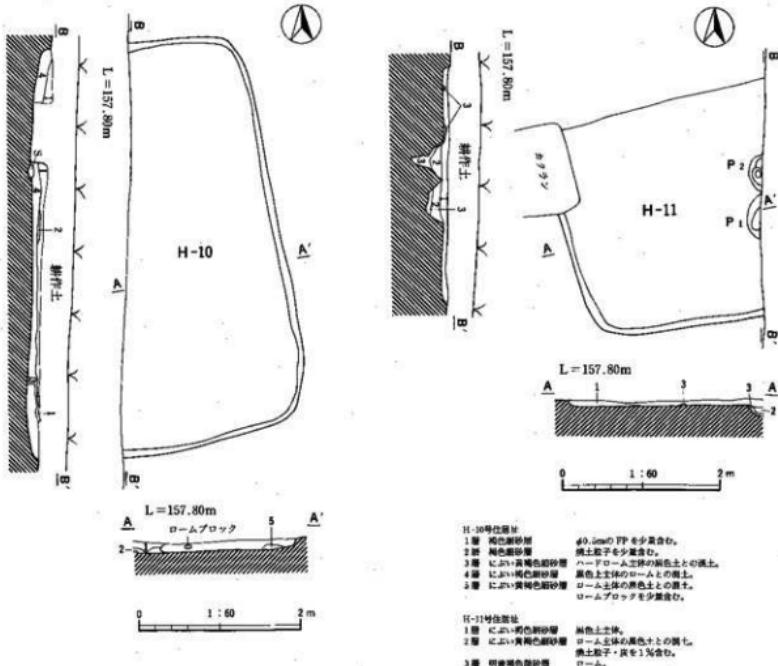


Fig14 H-10、11、12、14号住居址

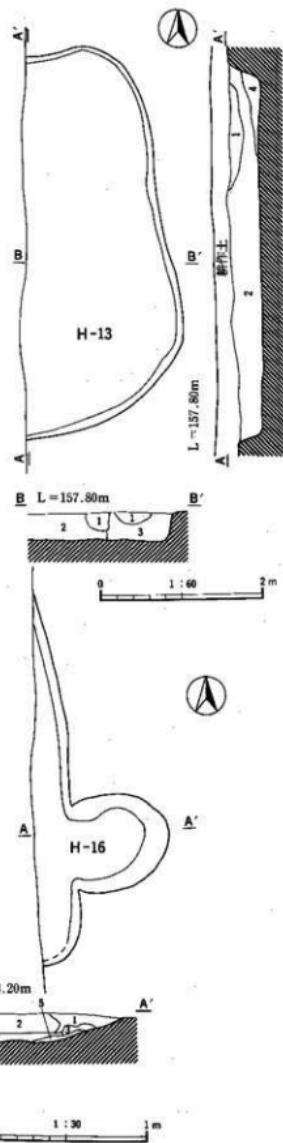
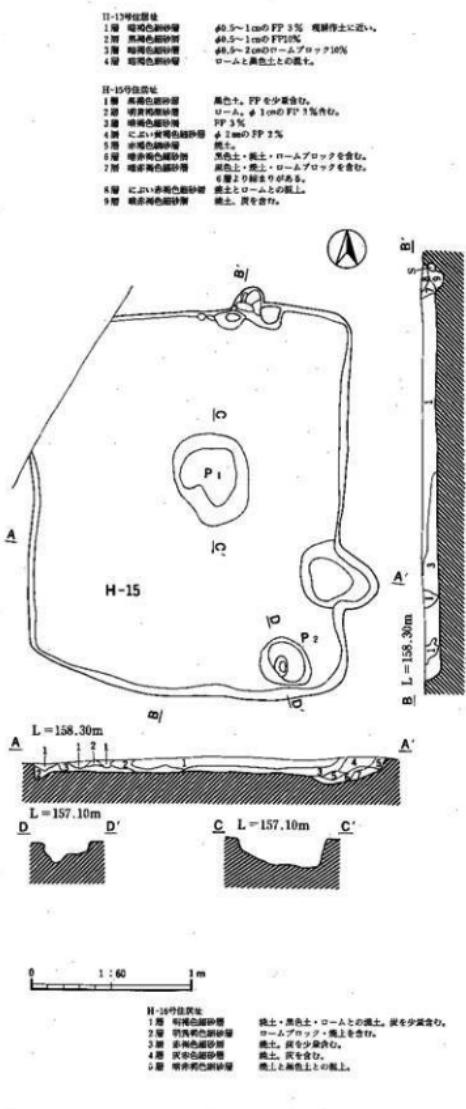
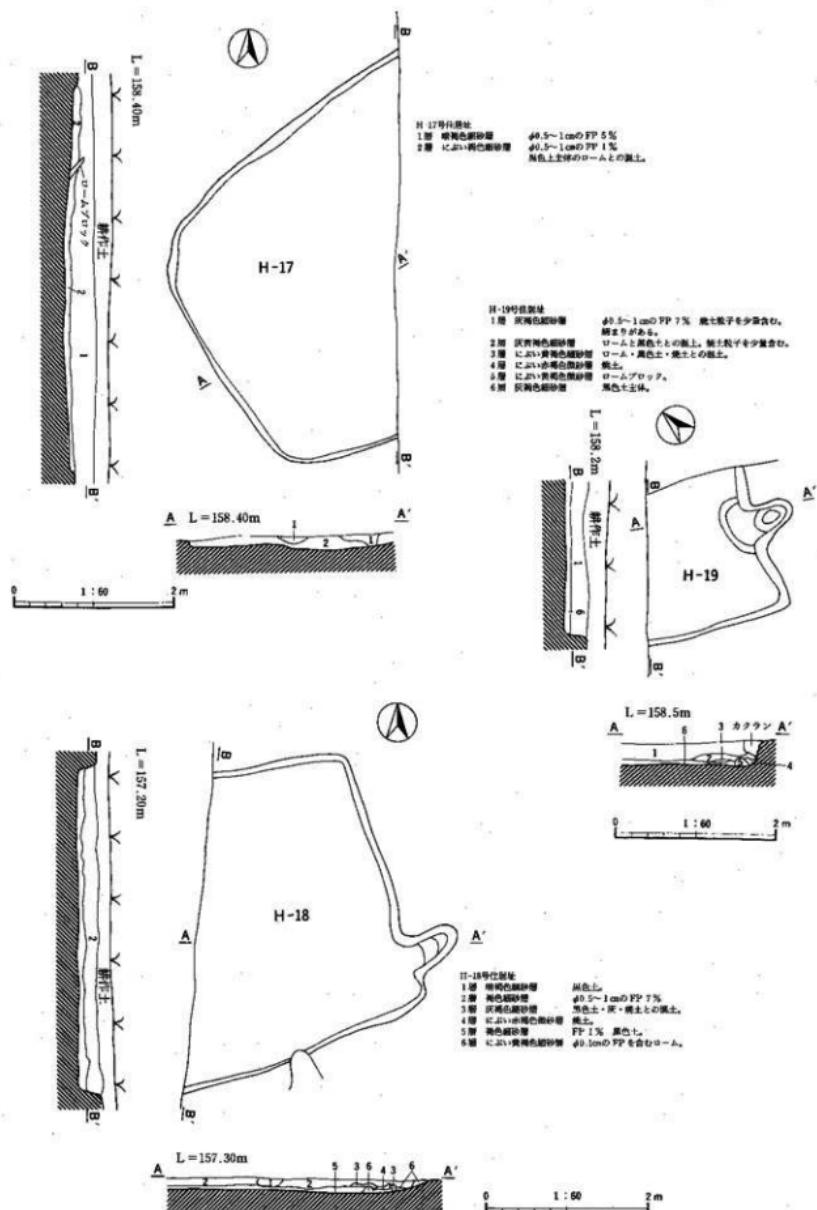
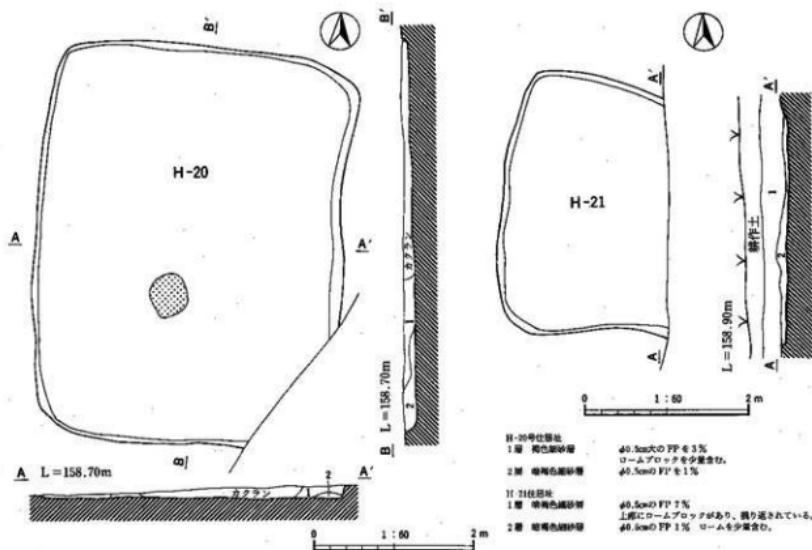


Fig15 H-13、15、16号住居址





H-20住居跡

- 1層 茶褐色細砂層 $\phi 0.5\text{cm} \text{の FP } 3\%$
ロームブロックを少量化。
- 2層 黄褐色細砂層 $\phi 0.5\text{cm} \text{の FP } 1\%$

H-21住居跡

- 1層 黄褐色細砂層 $\phi 0.5\text{cm} \text{の FP } 2\%$
上部にロームブロックがあり、振り返されている。
- 2層 黄褐色細砂層 $\phi 0.5\text{cm} \text{の FP } 1\%$ ロームを少量化。

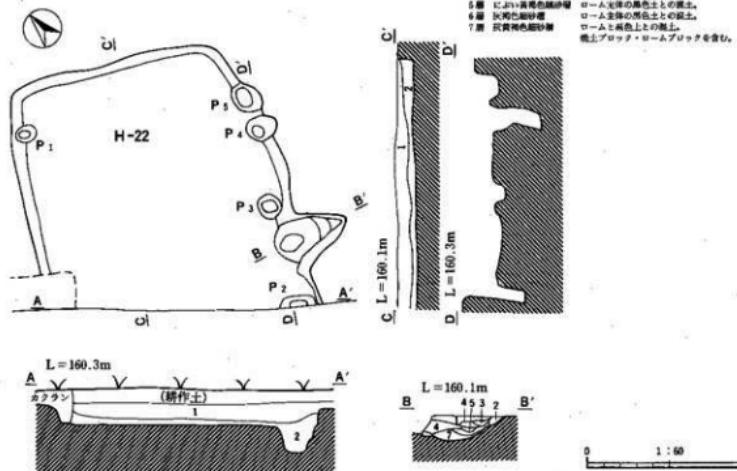


Fig17 H-20~22号住居跡

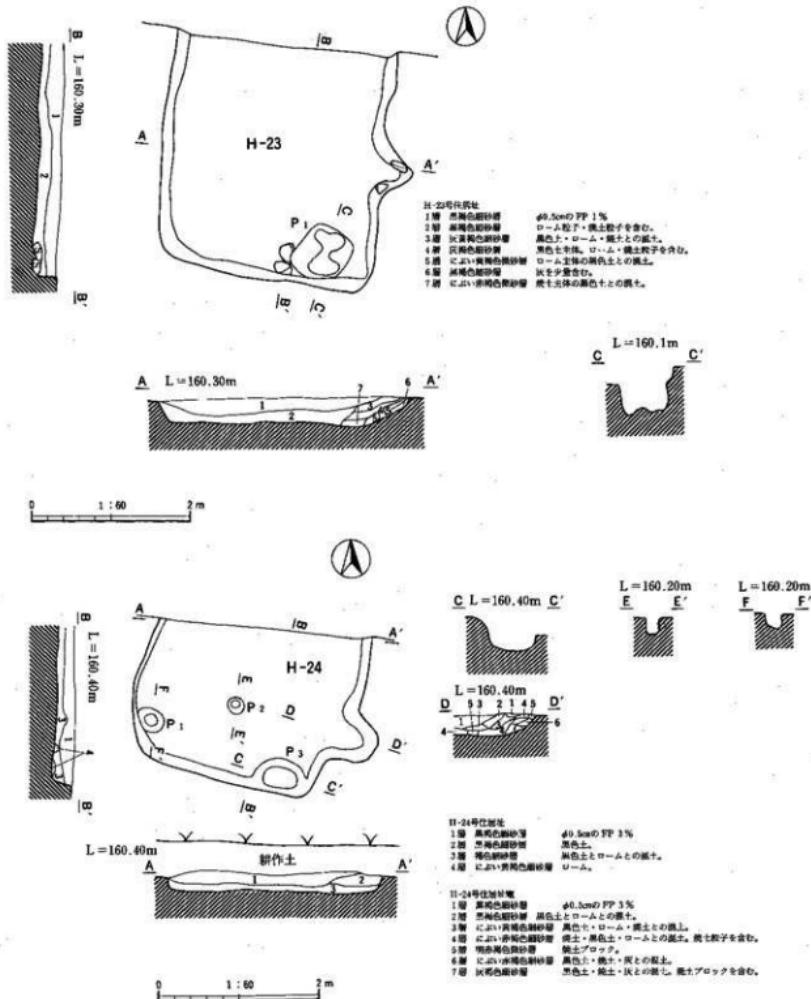
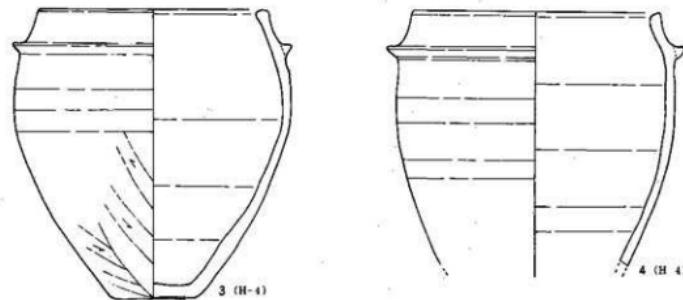
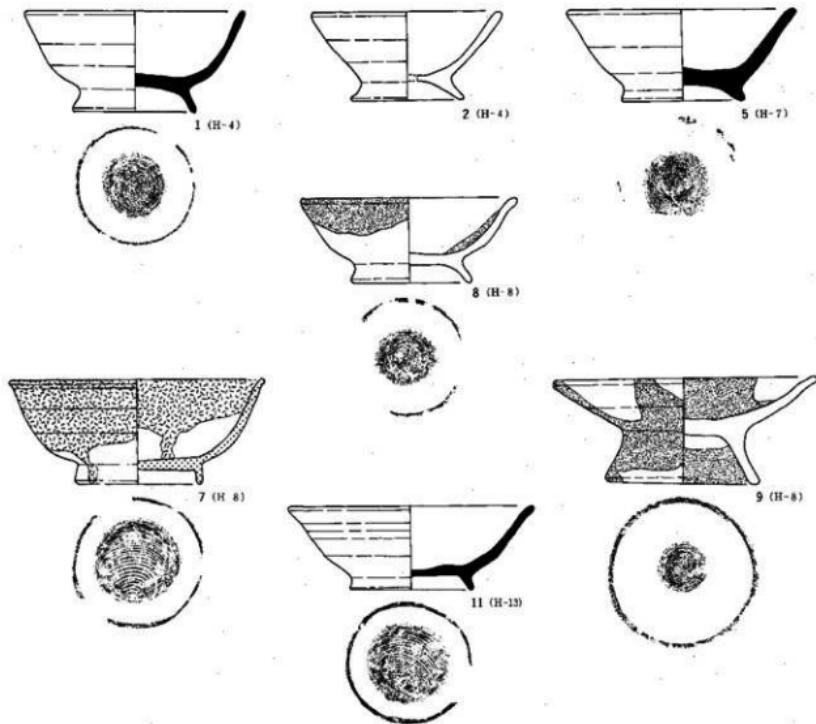


Fig18 H-23、24号住居址



0 1 : 4 10cm
(2 × 4)

0 1 : 3 10cm
(1 × 2 × 5 × 7 × 8 × 9 × 11)

Fig19 H-4、7、8、13号住居址出土の土器

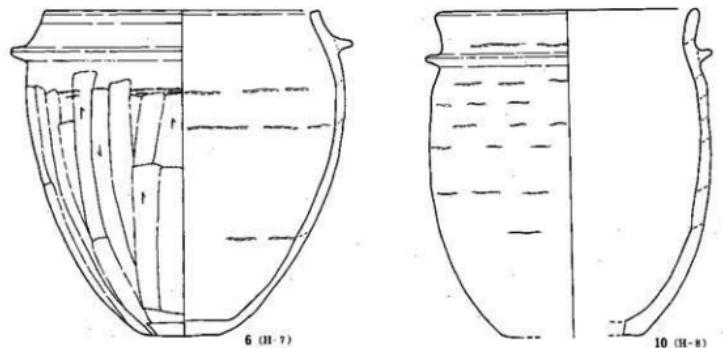
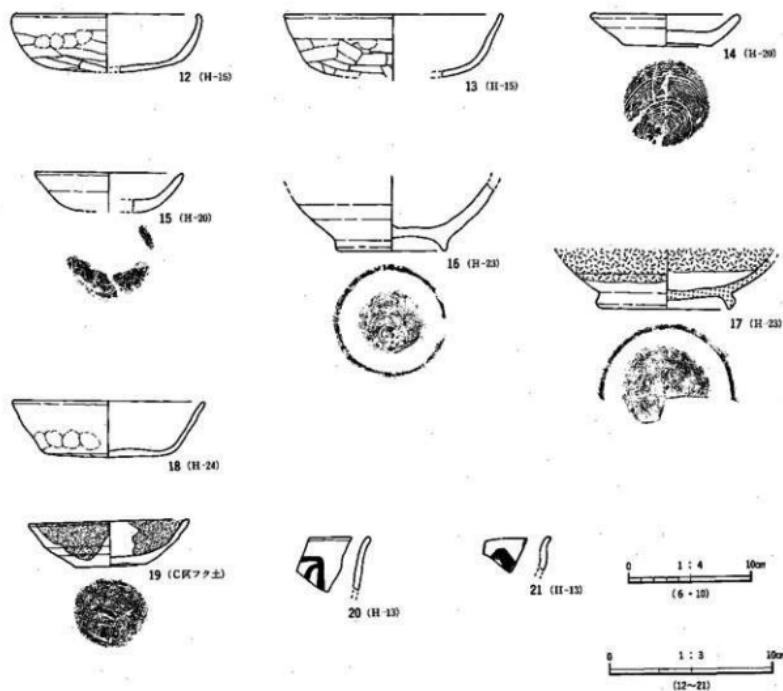


Fig. 20 H-7、8、13、15、20、23、24号住居址出土の土器

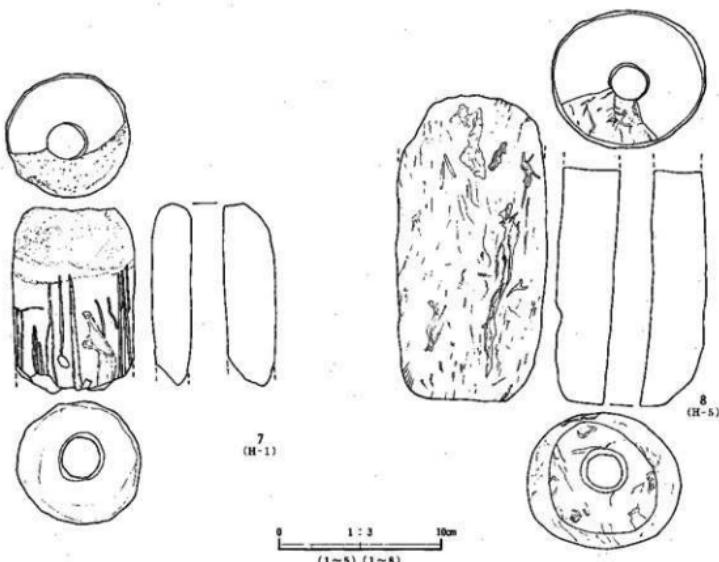
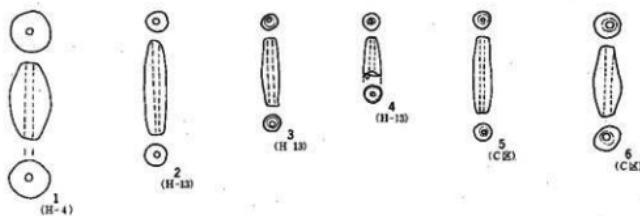
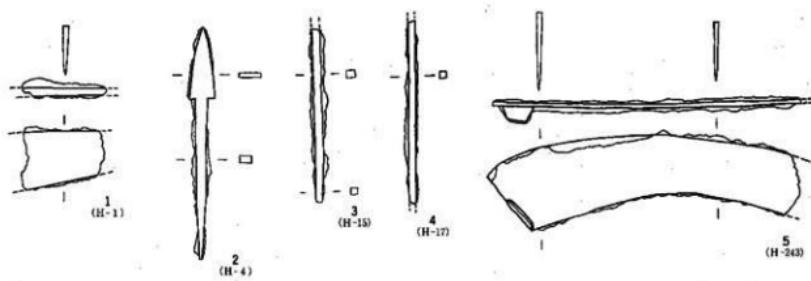


Fig21 鉄器・特殊遺物



Fig22 石器・石製品



H-1 全景(壁面)



H-1号 南ピット(南)



H-1号 炉(南)



H-1号 遺物羽口片(東)



H-1号 住居跡遺物出土状態NO.2(北)



A区全景（北）



H-3号 カマド周辺（北）



H-4・5・6号 住居跡全景（東）



H-4号 カマド全景（西）



H-5号 遺物出土状態（西）



H-7号 住居跡全景（西）



H-8号 住居跡全景（西）



H-8号 カマド全景（西）



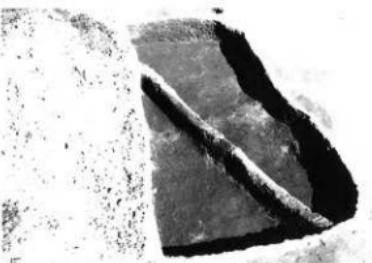
H-10号 住居跡全景 (東)



H-11号 住居跡全景 (北)



H-12号 住居跡カマド全景 (西)



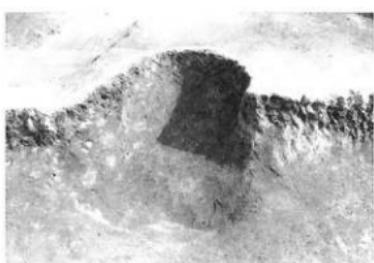
H-13号 住居跡全景 (南)



H-14号 住居跡カマド全景 (西)



H-15号 住居跡全景 (南)



H-15号 住居跡東カマド全景 (西)



H-15号 住居跡カマド全景 (南)



H-16号 住居跡カマド全景（西）



H-17号 住居跡南北セクション（西）



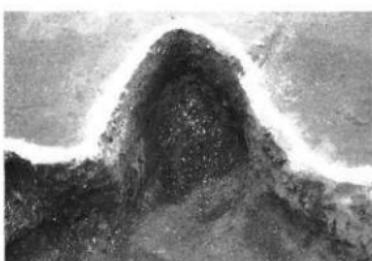
H-18号 住居跡全景（東）



H-18号 住居跡カマド（西）



H-19号 住居跡全景（東）



H-19号 住居跡カマド全景（西）



H-20号 住居跡全景（西）



H-21号 住居跡全景（西）



H-22号 住居跡全景（南）



H-22号 住居跡カマド全景（西）



H-23号 住居跡全景（西）



H-23号 住居跡カマド全景（西）



H-24号 住居跡全景（西）



H-24号 住居跡カマド全景（西）



B区全景（北）



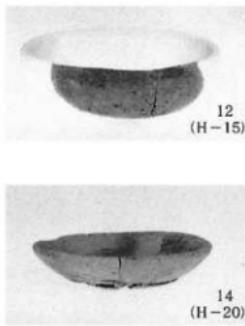
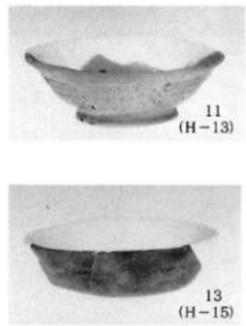
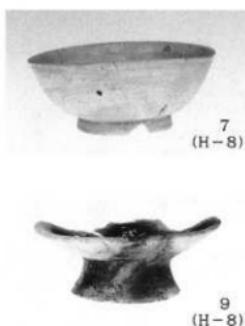
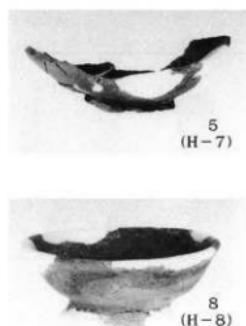
D区全景（北西）

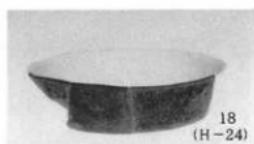


C区全景（垂直）



C区全景（南）





鉄器・特殊遺物・石器

抄 錄

フリガナ	タグチハチマンニイセキ
書名	田口八幡II遺跡
副書名	田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐藤則和 平石和明
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦2000年3月28日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東經			
田口八幡II遺跡	前橋市田口町	10201	11B7	36°26'32"	139°03'21"	19991020 19991203	1,600m ²	土地改良事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
田口八幡II遺跡	集落跡	奈良時代～平安	竪穴住居址24軒（うち、鍛冶工房1軒）	繩文土器、土師器、須恵器、鉄器、石器、石製品、特殊遺物
特記事項				

田口八幡II遺跡遺跡

2000年 3月20日 印刷

2000年 3月24日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

印刷 朝日印刷工業株式会社
前橋市元總社町67番地

